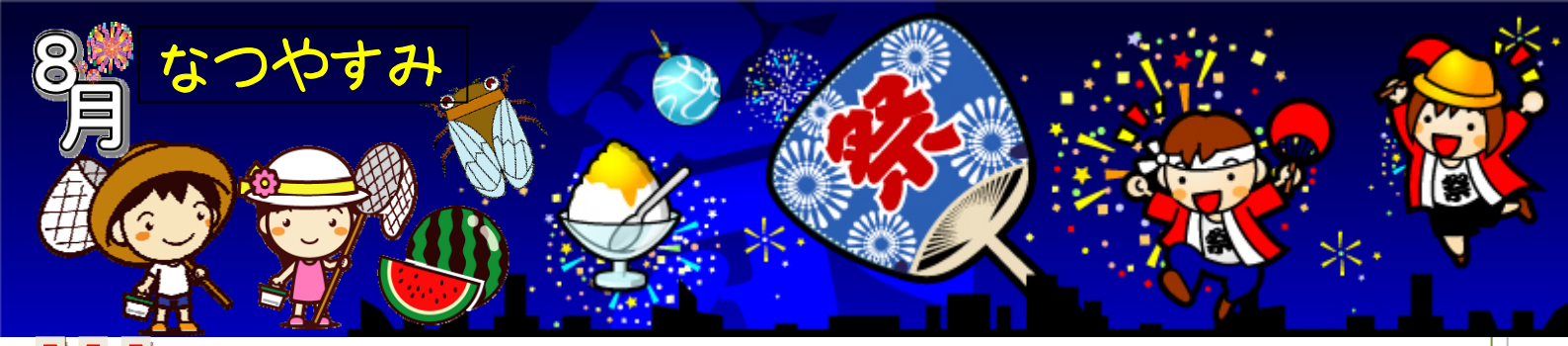


川系男子の『川と人』めぐり No. 16　～四国地方～

『川と人』めぐり	研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科　博士後期課程　白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

♪我は海の子白浪の　さわぐいそべの松原に
煙たなびくとまやこそ　我がなつかしき住家なれ

（文部省唱歌（6 年）『我は海の子』　作詞作曲：不明）

表１　四国地方『川と人』めぐり訪問先

日付	曜日	午前	午後	訪問先
7月2日	火		東京発	
7月3日	水	高松入り	土器川	香川県庁 土器川オアシス会 香川河川国道事務所
7月4日	木	吉野川	吉野川	まんのう池 香川用水記念公園 早明浦ダム 池田ダム 徳島河川国道事務所
7月5日	金	吉野川	那賀川	NPO法人新町川を守る会 徳島県庁 吉野川交流推進会議 那賀川河川事務所 阿南市社会福祉協議会
7月6日	土	物部川	物部川	物部川21世紀森と水を守る会 アクアリプルネットワーク
7月7日	日	仁淀川	仁淀川	大渡ダム NPO法人仁淀川お宝探偵団
7月8日	月	四万十川	四万十川	中村河川国道事務所 四万十川自然再生協議会 四国河川文化ネットワーク NPO法人RIVER 高知河川国道事務所 高知県庁
7月9日	火	肱川	肱川	大洲河川国道事務所 肱川流域会議「水中めがね」
7月10日	水	重信川	重信川 高松	愛媛県庁 松山河川国道事務所 重信川の自然をはぐくむ会 水をきれいにする会 重信川美化推進の会 四国地方整備局
7月11日	木	東京着		

１．四国８河川巡礼の旅へ

2013 年 7 月 3 日（水）から 10 日（水）にかけて四国地方の川で活動する市民団体の調査に出かけた．昨年の九州地方，中国地方の調査に続き，３つ目の地方である．訪問するのは 1 級水系で，九州地方 20 水系，中国地方 13 水系，四国地方 8 水系を合わせると 109 水系中 41 水系周ることになる．まだまだ 109 水系制覇には遠いが徐々に目標達成に近づいている．

図１　天の川に願いをこめる

寝台特急のサンライズ瀬戸号に乗り，四国へ向かった．今回の調査には後輩の A 君と K 君に同行してもらった．研究室内で一番体力がある A 君，歩く時刻表と呼ばれる豊富な交通知識の K 君とバランスのとれたパーティーだ．

行程は高松入りをし，土器川⇒吉野川⇒那賀川⇒物部川⇒仁淀川⇒四万十川⇒肱川⇒重信川と四国を一周し，再び高松に戻ってくる行程だ（**表 1**）．

瀬戸大橋を渡ると四国が見えてきた．いよいよ四国 8 河川巡礼の旅がはじまるという期待感を胸に四国へ降り立った．

7 月 7 日の七夕が近いこともあり，あちこちで七夕飾りがみられた．道中，短冊に願い事をした（**図 1**）．笹の葉に短冊を吊るし，天の川に願った．

図２　土器川流域にそびえる讃岐富士

図３　早明浦ダムのダム湖（貯水率 100%）

２．日本一小さな一級河川（土器川）

香川県庁/土器川オアシス会/香川河川国道事務所

香川県庁の河川課を訪ね，市民団体に関する情報を情報収集．香川県は『リフレッシュ「香の川」パートナーシップ』というアドプト制度を展開していて，香川県内の各河川において盛んにアドプト制度が展開されていて，対象河川の土器川流域の団体に関しても情報収集できた．

その後，高松から土器川流域のある丸亀市に移動．電車の車窓から土器川の河口が見えたが今までみたどの一級水系の河口よりも小さく，流量も少なかった．知ってのとおり，土器川流域は 109 水系の中でも流域面積 140km^2 と小さい流域の一つである．小さい流域の讃岐平野にぽこりとそびえる讃岐富士がよく映える（**図２**）．土器川の風景を見ながら到着したのは土器川オアシス会の事務所．名前が涼しげでちょっといってみたくなる．この土器川オアシス会は地元の建設会社の人達が地域貢献の一環で市民団体をつくり，活動している．川のゴミ拾いを定期的におこなっているほか，川祭りなどの行事もしているそうだ．土器川オアシス会の羽野健次さんのお話しによると，この流域は市民団体自体はそんなに多くないが，地域の自治活動がしっかりしているので，みんな自分の近くの土器川の区間は自分の庭のように日常的によくみていて，常にきれいな状態に保たれているようだ．

羽野さんに土器川を少し案内していただいたが，中流域の川幅に驚いた．ひょいとジャンプして飛び越えられるくらいの箇所もあり，川の中を渡って行き来できそうだ．こんな一級河川は初めてだった．いい意味でコンパクトな流域なため，自分の庭のように感じやすいかもしれない．

３．香川の水事情と吉野川（吉野川）

早明浦ダム/池田ダム/徳島河川国道事務所

２日目，吉野川に入る前に少しだけまんのう池と香川用水を見学．弘法大師が改修したといわれるダムだ．見学していると，池のほとりにある喫茶店のおばちゃんが，「あなたたちどこからきたん？ちょっとお茶いれてやるけん，のんでいきいな．」とお声かけいただいた．これは弘法大師さまが歓迎してくれているに違いないと何か直観的なものを感じ，お言葉に甘えてお茶とお菓子をいただき一息ついた．話を聞いていると今年は雨が多く，まんのう池もいっぱいで渇水になる心配は少ないそうだ．

おばちゃんにお礼を言って，香川用水記念公園を少しだけ見学．香川用水は吉野川水系から引いてきていて，香川の渇水を解消するためにも重要な水源となっている．

吉野川上流域の早明浦ダムに到着．渇水になるとよくニュースなどで出てくるダムだ．堤高 106m，堤頂長 400m，総貯水量 3 億 1600 万 m^3 と大きな多目的ダム（F,N,A,W,I,P）だ．早明浦ダムの堤体まであがってみると，クレストゲート付近まで水が溜まっており，7 月 4 日現在の跳水率は 100%だそうだ（**図３**）．とりあえず，渇水の心配はなさそうだ．

その後，下流に向かって吉野川沿いを走る．大歩危，小歩危付近の川はさすがは四国三郎という暴れ川の異名をもつだけのことはあり，激しくしぶきをあげて流れている．

その後，池田ダムを見学．堤高が 24m と形式は堰のようなかたちに近いが立派なダムでここから香川用水を送っている．

その後第十堰，徳島河川国道事務所でヒアリングと盛りだくさんの行程を経て，2 日目の吉野川下りを終了（字数の関係で省略）．

図４　新町川をクルージング

図５　川側に玄関を構える建物

４．川づくりはまちづくり（吉野川）
NPO 法人新町川を守る会/吉野川交流推進会議

3 日目，吉野川下流域の新町川を見学．新町川は河口三角州の一つの川で，周辺は流路で張り巡らされており，舟運で発達してきた．この川を利用して川まちづくりを進めているのが「NPO 法人新町川を守る会」だ．当日は副理事長の新居さんに船を操縦していただきながら，説明を聴いた（**図４**）．新町川のクルーズコースは 25 分で，200 円の保険代だけで乗船できる．年間の利用者数は 55 万人にも上る．川の汚い状況に憂い，まずは市民に川の状況をみてもらおうとはじめた．また，船で周遊してはゴミを集めるという地道な努力を行ってきた．そんな効果もあってか，活動当初は川に背を向けていた建物が川の方を向いて入口を設けるようになっていったという（図５）．また，川沿い周辺にはパラソルカフェもあり，川とまちの距離が非常に近い．イベントも会員のアイデアで，楽しいものが数多くある．特

図６　那賀川下流部の那賀川鉄橋

興味深い．「できるときにできる人ができること」をというスローガンのもと，無理なく楽しくやっているのが活動を行っていく上で重要と新居さんは言う．

午後からは吉野川流域のネットワークを形成する『吉野川交流推進会議』に伺った．徳島県が事務局をしていて，吉野川流域のつながりをつくっている．さらには暴れ川交流として，利根川，筑後川，吉野川で交流を行っており，流域の内外の交流が非常に円滑に行われている．

斬新な企画力，迅速な行動力，豊富な人脈をもつ以上２つの団体は間違いなく，日本の市民団体のモデルケースの一つである．川づくりはまちづくりに繋がっていることを感じられる事例だった．

５．協議会がかたちをかえて（那賀川）
那賀川河川事務所/阿南市社会福祉協議会

3 日目，那賀川河川事務所へ．那賀川の市民団体は少ないが，その一つに『那賀川アフターフォーラム』というものがある．もともと那賀川河川事務所が河川整備計画を策定する際に設置した『ゆきかう那賀川推進会議』が，上下流交流を進めてきた．ダム見学，流域写真展，那賀川源流コンサートなどを行い，流域が一体となって活動できる機会をつくった．本来は河川整備計画策定までの協議会形式の会に過ぎなかったが，参加者の中から今後も継続していこうという声が上がり，アフターフォーラムとして独立した活動を行う市民団体へと発達したそうだ．

那賀川鉄橋付近の那賀川で写真を撮り，時間の都合上，那賀川を後にした（**図６**）．

図７　荒廃する物部川上流域の山の斜面

図８　物部川の一斉清掃開始前

図９　水を得た川系男子

６．山の荒廃は川の荒廃（物部川）

物部川 21 世紀森と水を守る会/アクアリプルネットワーク/山嶺の森をまもるみんなの会/

3 日目夜からの 2 泊 3 日，高知県物部川流域に滞在．高知県香美市の川仲間の通称岩太郎君の実家にお世話になる．彼は 21 歳の最年少漁協組合員で仕事する傍ら川を愛する川漁師だ．投網や友釣りも非常にうまい．夕食でもとってきた新鮮な魚や高知県の特産品をたくさんごちそうになった．

4 日目午前中は物部川の市民団体をめぐった．物部川には今回一緒に活動を行っている 3 団体の方にお話しをお聞きすることができた．いずれの方も懸念として挙げたのが物部川上流域の山の荒廃である．近年シカの増加による下草の食害が進行しており，山の荒廃が進んでいる（**図７**）．これにより山の土砂が流出しやすくなっており，雨が降ると土砂が河川に流出し，川が濁水となる．これによりアユをはじめとする魚類の生育に大きく影響を与えると懸念されている．そんな山の異変は 2007 年より顕著になったと山嶺の森をまもるみんなの会の依光良三さん（高知大学名誉教授）はいう．最近では山に防塵柵を張ることで食害を食い止める効果もみられているが，防塵柵は広域的に張らなければならないので，費用と労力がかかる．山の荒廃防止対策の活動はもちろんのこと，川遊びや生物調査など体験活動や啓発活動も多く行なっている．水質は申し分ない物部川だが，川の濁度による河川環境への影響は興味深い点である．依光さんによると，四国の他の河川は雨が降ったあっと川の濁度が解消されるまでの期間が 2 日程度なのに対し，物部川は 20 日もかかっているとのことで、『山の荒廃は川の荒廃』というのは物部川の抱える課題であることが垣間見えた．

７．川系男子の川の日の過ごし方（物部川）

一斉清掃/大渡ダム/NPO 法人仁淀川お宝探偵団

4 日目の 7 月 7 日は川の日．天の川にちなんで制定されている．この日は四国の一級河川のあちこちで一斉清掃が行なわれるため，我々も物部川への御奉公．朝 7 時に行ってみるとすでに 30 人以上の人が集まっていた（**図８**）．ゴミ拾いがスタートするとみんな一斉に散らばり，堤防や水際などでゴミを探す．しかし堤防沿いを歩けど歩けどゴミが落ちていない．最終的に 30 人で集めたゴミの量はゴミ袋 3 袋ほど．たばこの吸い殻，釣り針などはほとんど落ちていない．これは物部川の利活用する人のマナーの高さの現れだろう．

清掃後，物部川を後にし，仁淀川に向かった．仁淀川といえば「仁淀ブル―」といわれるどの清流である．仁淀川の吸いこまれるような美しさに酔いしれ，思わず，川の中へ．水は冷たいが，水の中には美しい世界が広がっていた．水を得た魚のように泳ぎまわり（**図９**），透き通った冷たい水の中に野菜を冷やして食べた．夜は満点の星空が天の川をくっきりとつくりだしていた．川系男子が理想とする川の日日和の過ごし方だった．

８．仁淀ブルーの日常(仁淀川)
大渡ダム/NPO 法人仁淀川お宝探偵団

図１０　七夕飾りを川に流す習慣

川の日らしいことをして川を楽しんだ後，仁淀川上流へ向かった．上流域に行くと，沈下橋がみえる．沈下橋の上を走る軽トラが仁淀ブルーの美しさに日常感を与えている．

沈下橋を遠くから眺めていると，おばあちゃんと孫が七夕飾りを抱えて橋の上にやってきた(**図１０**)．何をするんだろうとみていると，なんと，橋から七夕飾りを投げた．どんどん流れていく笹の葉を孫がじっと見ていた．

慌てて駆けより，おばあちゃんにこれはなんなのか聞いてみた．このあたりでは７月７日に七夕飾りを川に流す習慣があるらしい．美しい清流には美しい川文化がある．天の川も遠くて近い川だと感じた．

さらに上流にあがり，大渡ダムへ．大渡ダムは総貯水容量約 6,600 万 m^3，堤高 96m，堤頂長 325m の多目的ダム（F,N,W,P）である．展望台からダムを見下ろすと堤体とダム湖が一体となってよくみえる．

大渡ダムで引き返し，下流へ下り，高知市内へ戻る．NPO 法人仁淀川お宝探偵団の生野さんにお会いした．仁淀川お宝探偵団は大きな行事として，『国際水切り大会』を主催している．自分のオリジナルストーンを河原で拾い，水切りの刎ねる回数を競う．子どもがなんとなく日常的にするような遊びを真剣に競い合うところにユーモアさがある．生野さん曰く，「仁淀川が日常的に美しいというこのことはすごいことであって，当たり前のことではないということを地元の人に知ってほしい．この美しさは奇跡的なことなんだと．」そういう日常的なものの中から美しさを探し出したいという意味を込めてつけられた名前は仁淀川お宝探偵団．

９．ラストリバーの風格（四万十川）
中村河川国道事務所/四万十川自然再生協議会/四万十川流域住民ネットワーク/四国河川文化ネットワーク･NPO 法人 RIVER/高知河川国道事務所/高知県庁

図１１　日本最後の清流と呼ばれる風格

５日目，高知県四万十市（中村）からスタート．中村は四万十川の下流域で，川幅も大きい．

この日は中村河川国道事務所を訪問し，四万十川自然再生協議会，四万十川流域住民ネットワークの方にお話しをお聞きした．四万十川流域自然再生協議会は 2003 年に流域の自然再生事業を開始し，協議会が設置された．協議会から活動が発展していき，四万十川流域で様々な市民活動を展開するようになった．四万十川の自然再生事業の主な柱は『アユの瀬づくり』，『アカメの淵づくり』，『ツルの里づくり』などがある．一つ面白かったのが，自然再生事業の『アユの瀬づくりの副産物ができたこと．河道内樹木を伐採し散在させた際に自然に菜の花が入ってきて，河川敷一帯が樹木をとり囲むように咲く菜の花畑になり，観光資源となっている．

次にお話しを伺った四万十川流域住民ネットワーク．流域のネットワークをつくり活動を始める．もともと四万十川はじめ，四国地方の河川は上下流交流等が少なかったため，連携事例が他地方に比べ少ないという．他地域に頻繁に行き来できない地形的な要因も大きいようだ．

また上流の十川の方まで四万十川を登る四万十川と沈下橋の風景はさすが『日本最後の清流』と呼ばれることはある（**図１１**）．

NPO 法人 RIVER を訪問した．20 代の若いスタッフで運営されていた．大抵は市民活動には 60 代中心が多いが，ここでは，四万十川の魅力に酔いしれ移り住んだ若い人が多く活動している．

１０．住民の川への関心はまず治水（肱川）

大洲河川国道事務所/肱川流域会議「水中めがね」/柳沢げんじぼたる保存会

図１２　肱川と冨士山（とみすやま）

6 日目，肱川の大洲を訪問．大洲河川事務所で肱川流域会議「水中めがね」の方に肱川の市民活動についてお話しを伺った．

水中めがねはネット会員 230 名，本会員 140 名の組織で，1991 年に結成された．行政と民間が連携して活動を行っている．この会は流域会議という名前でありながら団体会員を募る流域ネットワーク型の組織ではなく，あくまで個人会員を募る形態の会である．通常だと事務局が行政となっている会の場合，行政名で会員やオブザーバーとなっていることが多いが，事務局員もそれぞれが個人会員である形式をとっているという．行政と民間が連携した事例として，2005 年水位の変動情報を行政から会が取得し，メールマガジンで会員への情報発信を開始した．行政が情報発信を行った場合，誤報が出た場合，情報の信頼性の問題等があるが，市民団体があくまで一つの情報として発信することですばやく情報を共有することができる．

また肱川流域の住民が感心高いのは川の環境よりも治水であるという．この流域は 10 年間で 3 回も洪水に見舞われるという多発地帯である．肱川を案内していただき，冨士山（とみすやま）から眺めると（**図１２**），大洲付近は盆地になっていることがよく分かる．昔は遊水地的にあふれさせる堤内地が存在していたため，下流の狭窄部も守りやすかった．しかし現在は全ての堤内地を守るという治水方針となったため，水の逃げ場がなくなり，大水の時に溢れやすくなってしまった．事務所の人曰く数十ｃｍ単位で堤防を築堤する肱川の治水は綿密な計画で大変難しい．

１１．人の名前のついた川（重信川）

愛媛県庁/松山河川国道事務所/重信川をはぐくむ会/水をきれいにする会/重信川美化推進の会

図１３　流量の少ない重信川

7 日目最終日，重信川を訪問．重信川は江戸時代この川を治めた足立重信からきており，人の名前がついた一級河川はおそらくこの重信川だけだろう．

川を見たが，本川の流量が極めて少ない（**図１３**）．伏流しているためか瀬切れ状態にある部分も多く見られた．また水質も悪く，四国の 1 級水系の中で最も水質と水量に課題を持っている川と言えるだろう．

愛媛県庁で流域の団体の情報を収集した後，松山河川国道事務所を訪問し，重信川の自然をはぐくむ会の活動について尋ねた．

重信川流域では重信川の自然をはぐくむ会が活動しており，松山河川国道事務所が事務局を務めている．約 7 団体が合同で活動しており，はぐくむ会が各団体のネットワーク的役割を果たしている．流域の都市化により，瀬切れの拡大，水質悪化，泉や霞堤の消失など自然環境の悪化が進行していることをきっかけにし，愛媛大学，NPO，行政の連携により，2003 年に設立．

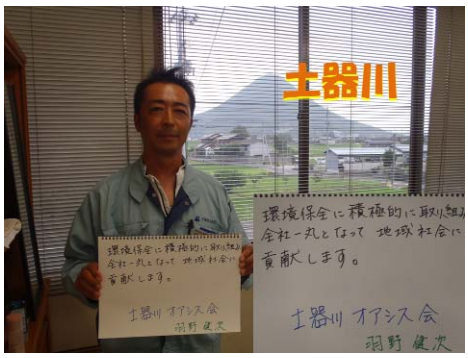
はぐくむ会の会員である，水をきれいにする会と重信川美化推進の会を訪ねた．水をきれいにする会はなんと 28 年も活動を続けている団体で，飲料水の安全性を考えることをきっかけに設立された．また，重信川美化推進の会は重信川流域の一斉清掃を行っており，流域を美化していく活動を行っている．

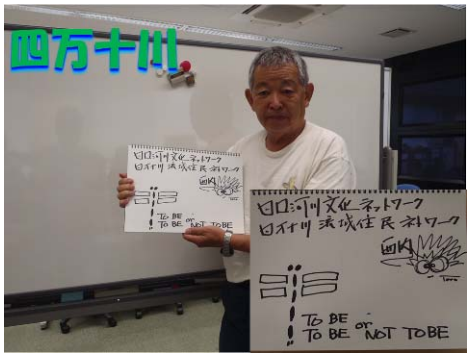
重信川の自然をはぐくむ会をはじめ，活動に活発な団体が多い．講演会，河川体験活動，モニタリング，清掃活動などを行っており，課題の多い川にはそれをどうにかしようと活発な市民団体が存在することが多いように思う．

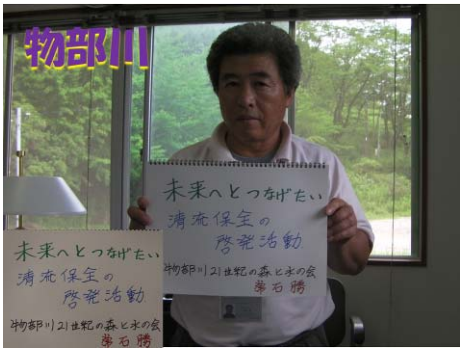
１２．四国８河川巡礼を終えて

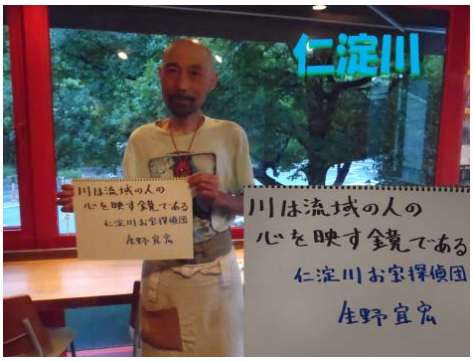
８河川全ての河川事務所と市民団体，４県全ての県庁を周りきり，四国を一周した．一周して高松に戻ってきて，最後の目的地として選んだ場所は四国地方整備局．今回の行程を計画するにあたり，各河川事務所との仲介を果たしていただいた．

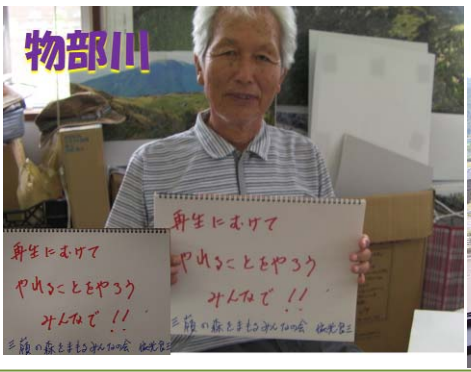
８河川を１川１川めぐることはまさに川のお遍路. 四国を一周して自身がどれだけ成長したかは定かではないが，四国の川の美しさ，人の温かさに多く触れることができた．今回の旅も無事に終了．お忙しい中対応していただいた四国のみなさまに感謝申し上げる．また９日間旅の仲間として後輩が抜群のアシストを果たしてくれた．彼らがいなかったらここまで充実した調査はできなかっただろう．研究室の渥美元貴君，鴨志田穂高君に謝意を表したい．

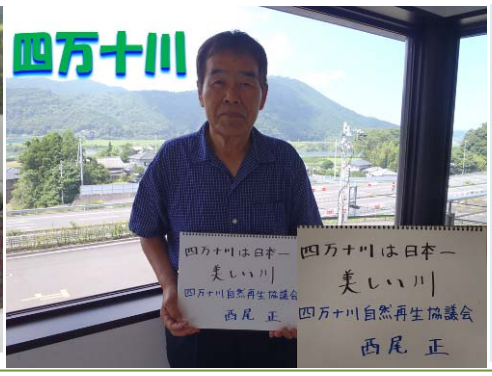












- 滞在日数:7日間(夜行含んで9日間)
- 四国内移動総距離:約1000km
- ダムカード獲得枚数:3枚
- 訪ねた河川事務所:8機関(関連含め12機関)
- 名刺交換した人:43名
- 旅をサポートしてくれた友人:3名
- 出会った行政の人:39名
- 出会った市民団体数:14団体
- 旅で出会った人:200名以上

夏休みは川へ行こう！

【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987 年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代には YNHC（青少年博物学会）、大学時代では JOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科　博士後期課程　構造エネルギー工学専攻在学。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りは川でおいしいものを食べること。